

中等部第1回

国語

令和4年2月1日実施

50分

2022年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一・二〕があります。
- 二、解答時間は五十分です。
- 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。
キリトリ線より切りはなしてください。
- 四、問題用紙・解答用紙の所定のところに書いて
ください。
- 四、問題用紙・解答用紙に、受験番号・氏名を
記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

中学二年生の真子は、両親との関係がうまくいかず、ある日家を飛び出す。町で見かけたポスターの絵に心うばわれ、その絵を描いた画家の夏鈴さんと偶然出会う。夏鈴さんは、家へ帰ることをためらう真子に、自分の家（イカル荘）でのホームステイを提案した。以下は、イカル荘での生活が始まってしばらくたったころのことである。

イカル荘のドアを開くと、木の香りにまじって、ふんと油絵の具のにおいがした。アトリエの引き戸がまた全部開いていた。そして、『※祈る少女』が、真子を迎えてくれた。

「ただいま」

真子はすぐに絵の前に立ち、カバンを横に置いて座りこんだ。

「お帰り」と、夏鈴さんの声がした。

真子はこの絵の前にいる時間が好きだ。時がやさしく流れていく気がする。

あけ放たれた窓から秋の気配のする風が吹きこんでくる。

①『祈る少女』の輪郭が少し和らいで見える。それは全く真子の気持ちのせいなのだけれど、お帰りと言ってくれているようでうれしくなる。少女の絵がでているときはいつも、静かに少女と言葉にならない話をする。

「この絵、力があるのね」

背後で夏鈴さんの声がした。

「自分で描くといてなんなんだけど、すごいんだっていうか、絵って、力があるんだって、改めて気づかせてくれる。わたしの絵なんて、まだまだなのに、それでも、だれかの力になってるって、真子ちゃんが教えてくれてる。ありがたいよね」

夏鈴さんも絵を見ていた。

「そうそう、今日、真子ちゃんのママさん、いらしたわよ」

②「え、ママが？」と、真子は驚いた。^{おどろ}

「あの、あの……」

「お元気そうだったわよ。[※]はじめてお会いしたとき、ずいぶんつまらそうだったけど、今日は笑顔^{えがお}も浮かべてらしたわよ」

それを聞いても、真子はママの笑顔を思い浮かべられなかった。

「そうですか」

「真子ちゃんの着がえを持ってらしてね、部屋の前に置いておいたからね」

「あ、ありがとうございます」

「わたし、ママさんが元気で、すごくびっくりしちゃって、どうしたんですか、なんて聞いちゃったのよ」と、夏鈴さんがふふと笑った。

真子も知りたかった。

「ママさんもよくわからない、って笑ってらしたわ」

「わたしがいないせいかも……」と、真子はつぶやいた。

「そんなふうに思わないの」

X

□ぶりで、夏鈴さんが言った。

「真子ちゃん、^{※となり}隣のネエさん、料理教室をやってるの知ってるでしょ？」

「はい」

ママの話とどうつながるのかわからないまま、真子はうなずいた。

「ママさんね、そこを手伝うことになったんですって」

「え、ママが？」

真子は^(a)シンソコ驚いた。心身ともに調子を崩^{くず}し、パートもやめ、何もかも、全くやる気がなくなってしまい、投げやりで、ごろりと横になって、暗い表情で部屋のすみを見つめているだけだったママが、料理教室を手伝うというのだ。

「真子ちゃんもびっくりしたんだ。わたしもびっくりして、それはよかった、なんて間の抜^ぬけたこと言っちゃった」

真子は夏鈴さんの顔を見た。

「ママさんね、わたしもびっくりしてますって言ってらした。よくよくたずねたら、中学校の保護者会で、ネエさんと話をしたんですって。そしたら流れでそうなったって」

「ママ、保護者会に来てたんだ……」

「そこまでお元気になられたってことよね。真子ちゃん、全然^{れんらく}連絡とってないんですって？ とって見たらどうかな」

③「真子はうつむいた。」

「ママさんね、真子のおかげですって」

「え、わたしのおかげ？」

「そうよ。真子が家をでていっちゃったせいで、いろいろ気がついたり、考えさせられたりしたって。ずいぶん長いこと、ついても十分くらいかな。この絵を見てらしたのよ。そして、真子には会わないで帰りますって……」

「そうですか……」

夏鈴さんは『祈る少女』の絵を見つめたまま口を開いた。

「親と子って、そんなに簡単に縁が切れるものでもなく、かと思えば、簡単に疎遠になることもあって、ほんとに難しいわね。わたしにとっては、とても大切な縁だと思うんだけどね」

夏鈴さんの口ぶりは、まるで、絵の中の少女に話しかけているようだった。

それを聞いて真子のはっと気づいた。

（夏鈴さんは、わたしなんかより、ずっと長い間、この絵の少女と話してきたんだ。あれ？ でも、描いた人なんだから当たり前かな）

そして、真子は口を開いた。

「あの、あの、聞いてもいいですか？」

「なあに？」

えくぼを浮かべて夏鈴さんが真子を見る。

「この絵、どうして、生まれたんですか？」

「え？」

夏鈴さんの表情が一瞬で変わった。

「知りたいの？ ④ 絵だけでじゅうぶんだと思うけど」

「あの、この絵を描いた夏鈴さんを知っているからかもしれないけれど、知りたいです」

「そういうものなのかな？」と、夏鈴さんの表情が曇っていった。

それを見て、真子はあわてた。

「あ、無理ならいいです」

真子の言葉が聞こえなかったかのように、夏鈴さんが口を開いた。

「この絵はね、わたしの母が亡くな^なって、少しってから描きだしたのよ。母は、末期がんだったの。ジジは余命を聞いてたらしいけど、わたしは知らなかった。ちょうどそのころ、海外で絵の勉強してたの。だから、知らせを受けて、突然に亡^{とつぜん}くなってしまったような気がして、ものすごくうろたえてしまったの。母はジジに、知らせるなって言ってたんですって」

聞いてはいけな^いことをたずねてしまったのかと、真子はまごついた。

夏鈴さんが座りなおして両ヒザをかかえた。

「わたし、教えてくれなかったジジをものすごくうらんだの。そしてね、同時に、母とケンカしてひどい言葉を投げつけてた自分を責めて、責め続けてた。おまけに、あのときこうすればよかったって思いだしたら止まらなくなっちゃって、とても苦しかった。泣いて、泣いて、それこそ幼い子が泣いてるみたいに泣き続けたの。このまま泣き続けたら、母のところにいけるのかな、なんてね」

真子のムネが苦しくなる。

「泣き疲れて寝こんじゃったとき、このままじゃ本当に自分がダメになるって思ったの。立ちなおりたいと思いはじめた。そのとき、わたしには絵しかないんだって気がついたの。だから絵を描こうと思ったの。どんな絵にするかなんて考えもせず、ただ鉛筆を持ってキャンバスに向かったのよ。そしたら、この少女がでてきたの」

真子は少女を見あげた。

⑤「勝手に手が動きだしてね。どの色、どの背景なんて考える必要なんか、なかった。すべてが、そのときのわたしの中であつたから、それを写しただけなのよ。描きながら、泣いて、自分にアクタイをついて、また泣いて。絵の前で泣きながらこころがつて床をたたいたこともあつた。キャンバスをやぶいて自分が入りこんでしまいたいほどだったの。他のことなんて何も考えられなかった」

一気に話すと、そこで夏鈴さんは言葉を切った。真子のまぶたに、無我夢中で絵筆を動かす夏鈴さんの姿が見える。制御不能な炎が、夏鈴さんの内で燃えさかっていたに違いない。

(にしがきようこ『イカル荘へようこそ』PHP研究所)

※『祈る少女』……夏鈴さんの描いた絵。ポスターに描かれていたもの。

※はじめてお会いしたとき……一日だけという約束でイカル荘に泊まった真子を、父と母が迎えに来たときのこと。その後、さらに一か月ホームステイすることになった。

※隣のネエさん……夏鈴さんの義理のお姉さんのこと。イカル荘の隣には、夏鈴さんの兄夫婦が暮らしており、その子どもは真子のクラスメートだった。

※ジジ……夏鈴さんの父のこと。

※キャンバス……油絵を描くのに用いる画布。

問一 線部(a) (c) のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 X に入れるのに、もつとも適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア うたうような

イ からかうような

ウ おこったような

エ 驚いたような

オ はぐらかすような

問三 線部①「『祈る少女』の輪郭が少し和らいで見える。」とありますが、どのようなことですか。三十五字以内で説明しなさい。

問四

——線部②「『え、ママが?』と、真子は驚いた。」とありますが、それはなぜですか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ママは自分のことを見放して、親子関係の改善をとくにあきらめていると思っていたので、イカル荘を訪ねてきたことが意外だったから。

イ パートに出かけることはおろか、笑うこともなく家でじっと過ごすだけで精いっぱいだったママが、まさか一人で外出し、イカル荘を訪ねてくるとは思ってもいなかったから。

ウ 家出同然でホームステイを始めたことを、ママは怒っているにちがいないと思っていたので、自分に会いくるはずがないと思い込んでいたから。

エ 以前よりも家で横になって過ごすことが増え、すっかり元気をなくしてしまったママが、無理をして自分に会いにくるほどの大切な用事があるとはとても思えなかったから。

オ 体調が優れないママに、一人でイカル荘まで外出させるような無理をさせた原因は、自分が家を飛び出したことだと気づいて衝撃を受けたから。

問五

——線部③「真子はうつむいた。」とありますが、この表現から読み取れることとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 夏鈴さんにママと連絡を取ることをすすめられたものの、そのアドバイスを受け入れることができず、顔を上げられないでいる。

イ ママと連絡を取っていないことをとがめられたように感じ、親身になってアドバイスをしてくれる夏鈴さんに申し訳なさを感じている。

問六

——線部④「絵だけでじゅうぶんだと思うけど」とありますが、ここから夏鈴さんのどのような心情が読み取れますか。もっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 純粋に作品そのものを鑑賞してほしいのに、余計なことを知りたがる真子をたしなめる気持ち。

イ 自分の全てを注ぎ込んだ絵の意味が真子には伝わらず、その由来を聞かれたことを悲しく思う気持ち。

ウ 絵が生まれた理由を教えてほしいと思いがけず真子に言われたが、それを話すことをこばむ気持ち。

エ 絵画に関心を持ち、作品の背景を積極的に質問するといった明るい変化を見せる真子をじらす気持ち。

オ それまで元気のなかった真子に自分の絵が力を与えたことを、画家としてほこらしく思う気持ち。

問七

——線部⑤「勝手に手が動きだしてね。」とありますが、夏鈴さんをつき動かしたものを、たとえを用いて表現した部分を本文中から探し、五字程度で抜き出さなさい。

問八 本文の内容を説明したものとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 母親を失った夏鈴さんには、家族と仲たがいでいる真子の様子は見てもらえないほどつらく、自分の身に起きた出来事をかくさずに話すことで、一刻も早く家族の元で暮らしてほしいと思った。
- イ 絵の少女との対話を通して自分の心を整理することができた真子は、ママを見捨てて家を出た自分を許し、親子関係を改善するための一歩を踏み出す^ふ勇気を持てるようになった。
- ウ 夏鈴さんが絵と真剣^{しんけん}に向き合うことになったのは、母の病気に気づくことができなかった自分を責める思いと、母の本当の気持ちを理解しようとしなかった父への反発心がきっかけだった。
- エ 自分に力を与え、ママに料理教室で働き始めるきっかけをくれた少女の絵を真子は好ましく思っていたが、作者である夏鈴さんに制作過程を教えてもらったことで絵に対する印象が変化した。
- オ 家族関係に悩み^{なや}イカル荘でホームステイをしていた真子は、自分の心をひきつけた『祈る少女』の絵が夏鈴さんの深い悲しみから立ち直ろうとする思いによって生まれたものだ^だと知った。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

「アイデンティティ」とは何なのか。その定義は分野によって^{ちが}違う。しいて言えば、「私という人間」とでも表すことができる。「私がどんな人なのかというイメージ」のようなものだ。「はじめに」で見たように、「私」だけでなく、話している相手や会話で話題になっている人の人物像を指す場合もある。

そんな、あいまいな概念^{※がいねん}だが、[※]社会言語学では、アイデンティティを以下の四つの特徴^{とくちゆう}から考える。

- 1 アイデンティティは人と関わり合う中から立ち現れてくるもので、私たちは、すでにあるアイデンティティにもとづいて人との関わり方を決めているのではない。だから、人と関わる^(a)ときに大きなヤクワリを果たす「A」は、重要だ。
- 2 アイデンティティには、大きく三つの側面がある。
- 3 アイデンティティを表現するのに利用できる「A」には、いくつかの種類がある。
- 4 アイデンティティは、さまざまな方法で表現されるので、いつ表現されたアイデンティティも、その人のすべてを表しているのではなく、いつも部分的になる。

以下で、ひとつずつ見ていこう。

①最初の、「アイデンティティは人と関わり合う中から立ち現れてくるもので、私たちは、すでにあるアイデンティティにもとづいて人との関わり方を決めているのではない」という考え方は、ことばとアイデンティティの関係から理解すると分かりやすい。

②これまで、ことばとアイデンティティの関係は、あらかじめ話し手には自分のアイデンティティがあつて、そのアイデンティティが言葉づかいにも自然にあらわれると理解されていた。謙虚な人はいい言葉づかいをし、傲慢な人はおうへいな言葉づかいをする。ある人がいい言葉づかいをするのは、その人が謙虚な人だからだと考えられた。つまり、「私たちは、すでにあるアイデンティティにもとづいて人との関わり方を決めている」と考えられていたのだ。

③X、アイデンティティをその人にあらかじめ備わっている属性のようにとらえて、人はそれぞれの属性にもとづいてコミュニケーションをするという考え方を「本質主義」と呼ぶ。

④Y、アイデンティティのうちで「ジェンダー」（女らしさや男らしさ）に関わる側面を本質主義にもとづいて表現すると、人は〈女らしさ〉や〈男らしさ〉を「持っていて」、その〈女らしさ〉や〈男らしさ〉にもとづいて、ことばを使うと理解される。ある人が女らしい言葉づかいをするのは、その人が女らしいからで、男らしい言葉づかいをするのは、その人が男らしいからだと言われた（ちなみに、本書では、「性別」ではなく「ジェンダー」を用いる。性別とは生物学的な性の違いを指し、ジェンダーは、社会的文化的な女らしさや男らしさを指す）。

⑤Z、このような考え方には説明のつかないことがたくさん出てきてしまった。もっとも大きな問題は、私たちはだれでも、それぞれの状況に応じてさまざまに異なる言葉づかいをしていることがはっきりしてきた点である。同じ人でも、家庭での言葉づかいと学校での言葉づかいは異なる。同じ学校で話していても、話す相手や、場

所、目的によって異なる。さらに、同じ人でも子どもの時と大人になってからは言葉づかいが変わる。同じ〈男らしさ〉を持つている人でも、その言葉づかいはそれぞれに異なる。むしろ、いつでも、だれとでも、同じ言葉づかいで話している方が不自然に感じられるのではないだろうか。もし、私たちが、すでにあるアイデンティティにもとづいて人との関わり方を決めているのだとしたら、このように言葉づかいが多様に変化することを説明できない。

⑥そこで提案されたのが、アイデンティティをコミュニケーションのBではなく結果ととらえる考え方である。私たちは、あらかじめ備わっている〈日本人・男・中学生〉という属性にもとづいて言葉を選んでいるのではなく、人とのコミュニケーションによって自分のアイデンティティをつくり上げている。「私は日本人だ」「男として恥ずかしい」「もう中学生になった」などと言う行為が、その人をその時〈日本人〉〈男〉〈中学生〉として表現すると考えるのである。

⑦アイデンティティを、その人が「持っている」属性とみなすのではなく、人と関わり合うことでつくりあげる、つまり、「アイデンティティする」行為の結果だとみなすのである。このように、アイデンティティを、他の人とのことばを使って関わり合うことでつくり続けるものとみなす考え方を「構築主義」と呼ぶ。

⑧構築主義によれば、人はあらかじめ「持っている」アイデンティティを表現しているのではなく、他の人と関わり合う中で、その時々に応じて、さまざまなアイデンティティを持った人間として立ち現れるのだ。本書では、構築主義の考え方にもとづいて、ことばとアイデンティティの関係を見ていく。

⑨「構築主義」という考え方の特徴は、何よりも、私たちのアイデンティティは、他の人との関わり合いの中で表現されるものだと考える点だ。関わり合う相手は、人間でなくてもよい。ペットに話しかけるとときには、自分でもびっくりするぐらい優しい自分になっている時がある。

⑩しかし、ここまで読んできて、いくつかの疑問を持った読者がいると思う。

⑪まず考えられる疑問は、他の人と関わり合うことで、その時々に応じてアイデンティティを表現するとしたら、人と関わり合う前の自分は空っぽなのかという問いだ。この、「自分は空っぽ」というのは、たいていの人の感覚とずれている。むしろ私たちは、自分の中には何か自分らしさがあるという感覚を持っているのではないか。

⑫これに対して、構築主義を提案した人たちは、次のように説明する。私たちは、繰り返し習慣的に特定のアイデンティティを表現し続けることで、そのアイデンティティが自分の「核」であるかのような幻想を持つ。

⑬そう言われてみると、私たちが日常的に関わり合う人たちは、結構、似たような人であることが多い。毎日、新しい出会いがある人もいるかもしれないが、たいていは、家族やクラスメート、学校の先生など、同じような顔触れなのではないだろうか。だとすると、私たちは、日常生活で関わる人に対して、かなり長い期間、繰り返し、同じような自分を表現していることになる。そして、それが「自分らしさ」を形成していると感じるようになっているとしても、不思議ではない。

⑭哲学者のジュディス・バトラーは、ジェンダーに関わるアイデンティティについて、「ジェンダーとは、身体をくりかえし様式化していくことであり、きわめて厳密な規制的枠組みのなかでくりかえされる一連の行為であって、その行為は、長い年月のあいだに凝固して、実体とか自然な存在という見せかけを生み出していく」と指摘している（バトラー一九九七：七二）。

⑮つまり、女らしさや男らしさに関わるアイデンティティの側面も、身近な人との関わり合いの中で、長い間繰り返し表現していくことで、「自分の女らしさ、あるいは、男らしさはこんな感じ」という感覚が確立していくというのだ。

⑯もうひとつ考えられる疑問は、私たちは、その時々に応じて、さまざまなアイデンティティを持った人間として立ち現れるとしたら、自分のアイデンティティは複数あるのかという問いだ。これは、「アイデンティティ」をどのように理解するかという難しい問題をはらんでいる。しかし、アイデンティティをひとつに限る必要はないと考える人はいる。

⑰たとえば、作家の平野啓一郎は、『私とは何か』（二〇二二）の中で、「個人」ではなく「分人」という考え方を提案している。この本によると、たったひとつの「本当の自分」など存在しない。むしろ、対人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「本当の自分」である。

⑱「分人」という考え方の素晴らしいところは、たとえ、Aさんとの関係で見せている自分は好きでなくても、Bさんとの関係で見せている自分をササエにしていると示している点だ。学校でいじめられて苦しんでいる自分がすべてではなく、家に帰って家族から愛されている自分を認めることで生きていける。

⑲このように、複数のアイデンティティを表現することは、後期近代の特徴だという人もいる（キデンズ二〇〇五）。そう言われてみると、以前の日本企業は、終身雇用が売りだった。一度就職すれば、退職するまで同じ会社で働く。自分のアイデンティティは、昇進などで変わるぐらいで、キホンのには、会社の限られた人間関係にもとづいていた。へたをすると、「会社」が、その人のアイデンティティになる場合も多かった。

⑳ところが今は、ひとつの会社に就職しても、転職する人もいる。同じ会社で働く人も、正社員から派遣社員、嘱託やアルバイト、それに加えて転職組など、あらゆる立場の人たちが一緒だ。会社の上下関係だけにもとづいて接しているのは、仕事が動かない。それぞれの立場の人が、他の立場の人と、アイデンティティを調整しながら関係を築いていかなければならない。現代人が生きる人間関係はより複雑になり、結果として、場面ごとに異なる複数のアイデン

ティティを生きる必要が発生したのだ。

(中村桃子『「自分らしさ」と日本語』筑摩書房)

※概念……物事について一つにまとめた意味内容。

※社会言語学……社会とことばの関係を考える学問。

※属性……ある物事に備わる固有の性質。

※はらんでいる……内部にふくんで持っている。

※嘱託……正式の社員に任命しないで、ある業務にたずさわることを依頼^{いらい}すること。また依頼された人。

問一 線部(a) (c)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 A には同じ語が入ります。もつとも適切な一語を本文中から抜き出して答えなさい。

問三 X Zに入る接続語として適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ たとえば ウ また エ このように オ なぜなら

問四 B に入る「結果」の対義語を、漢字二字の熟語で答えなさい。

問五 形式段落1 20の部分を三つの意味段落に分けると、二段落目と三段落目はどこから始まりますか。形式段落番号の組み合わせとしてもつとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 2 10
イ 6 16
ウ 10 19
エ 10 16

オ 6 19

問六 線部①「このような考え方」の指す語を、本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問七 本文における「本質主義」「構築主義」はそれぞれのどのような考え方ですか。その定義を本文中から抜き出して答えなさい。

問八 線部②「他の人と関わり合うことで、その時々に応じてアイデンティティを表現する」としたら、人と関わり合う前の自分は空っぽなのかという問いだ。」とありますが、これに対する筆者の説明を七十字以内でまとめて答えなさい。

問九 線部③「現代人が生きる人間関係はより複雑になり、結果として、場面ごとに異なる複数のアイデンティティを生きる必要が発生したのだ。」とありますが、これについて、以下の三つの条件をふまえて、あなたの意見を書きなさい。

- ①あなたはこのことを良いことだと考えますか、良いことではないと考えますか。どちらの立場に立つかを書き、そう考える理由を書きなさい。
- ②あなたの持つ複数のアイデンティティの例をあげながら書きなさい。
- ③段落は、二つか三つ、作ること。

総 点
科 目
国 語
受験番号
氏 名

総 点
科 目
国 語
受験番号
氏 名

[illegible][illegible]